

Course N@viで フリー動画を共有。 反転授業でディベートを学ぶ

IT化、グローバル化が進む社会で生きていくには、コミュニケーション能力、批判的思考能力、問題解決能力などの21世紀型スキルが必要とされる。留学生を対象にしたこの授業では、そのリテラシーを修得させるために日本語によるディベートを実践している。多様なバックグラウンドを持つ学生ならではの学びの課題解決に、ICTの活用が大きな役割を果たしている。



多様な学生に対応するため、 各自で事前に動画を視聴させる

この授業の履修生は毎学期10~25名程度で、その中から5名前後でグループを作り、15週の間合計3回のディベートを実践している。その狙いは、日本語表現を学ぶだけでなく、チームワークで準備をするというプロセスを通して21世紀型スキルを学んでほしいという点にある。「好奇心旺盛な学生たちのやる気を活かせる、学習者主体の場作りをしたいのです。卒業後、世界のいろいろな場面でリードしていく立場になるであろう学生たちに、せっかくこの早稲田という場所で集まったことを生かして、何か真剣に調べたり議論したりさせたいと考え、ディベートを取り上げました」。

しかし、実際に授業を始めると、さまざまな課題が浮かび上がってきた。集まってくる学生は文化的背景や年齢、国籍、所属学部もバラバラ。日本語スキルや論理的思考能力、ディベート経験の有無も様々ではない。そんなメンバーがグループワークの準備を行うのは、授業時間内だけでは限界があった。「学生の意欲に個別に対応しながら、協働学習をスムーズに進めるためにICTの活用を考え、試行錯誤を重ねてきました」。

たとえば、2014年度にこの授業が開講した当初は、ディベートの基本を学ぶために実際にディベートをしている映像のDVD教材を授業時間内に視聴させていた。「時間の制約もあり部分的にしか見せられませんが、本来はその間の流れを見てもらいたいです。また、母国でディベート経験があり映像を見なくても理解できる学生もいれば、何度も繰り返して見たい学生もいます。それを一律に扱うには無理があると感じました」。

そこで、次年度からはこれを事前学習として各自で視聴させることとした。ただし、教材用DVDは著作権の問題もあるため、フリーで公開されているユーチューブなどの動画URLをCourse N@viを通じて共有している。「自分が見たいところを何度も繰り返しゆっくり見てもいいし、見なくても分かるという学生は見てこなくてもいい。ただし、その部分の解説は授業では扱わないので自己責任でということですよ」。

その上で、ライセンス問題のあるDVD映像は、ポイントとなる

部分を授業時間内にみんなで視聴し、解説を行った。「反転授業のような形を取ったことで、みんなが退屈することなく、効率的に進められるようになりました」。

リサーチ作業には、 ネットの豊富なリソースを共有する

ディベートの論題が決まると、それにまつわるリサーチを学生が各自で行うが、経済問題など難易度が高いときには、教員からも参考となる材料を提供する。「テーマは時事ネタも多いですし、基本的に学生たちが決めるので何が出てくるかわかりません。私の手元にある資料は限られているので、インターネットなどで入手できるフリーリソースはとても有用です」。

インターネット上には新鮮で豊富なリソースが出回っている現状で、それらを利用しないのは、むしろ学生を隔離してしまうようなものとも感じている。「今どきの学生は紙ベースでは退屈してしまうという現状もあります。生教材を使わざるを得ないという状況において、Course N@viから手軽に共有できるのはとてもありがたいことです」。

ネットで見つけた字幕付きニュース動画のURLをCourse N@viで配信することもあれば、新聞にルビを振って教室でみんなで読むこともある。「対面と非対面、アナログとデジタルのハイブリッドで、適宜うまく組み合わせています」。

各自で行うリサーチは必ずしも日本語資料である必要はないが、出典を明記した上で日本語でまとめ、Course N@viからリサーチ課題として提出させる。「メール添付だと学生ごとに整理するのも大変なので、Course N@viが使えるのはとても効率的です」。

共同作業はLINE、Skypeなど 使いやすいものを自由に使う

その後、各グループに賛成、反対、ジャッジの役割を割り振り、それぞれが協力して準備作業に入る。授業時間内だけでは終わらないため、それを補うために各グループ内でLINEやSkype、

Google ドキュメント、Google ハングアウトなどのICTツールが利用されている。「共同作業の方法について私のほうから指示することはありません。学生たちが、それぞれ自分たちの都合と目的に合わせて、使いやすいと感じるものをうまく組み合わせ使っているようです」。

たとえば、使う語句まで細かくこだわりたいためにGoogleドキュメントで原稿を共同編集するグループもいれば、Google ハングアウトを使って予行練習をするグループもいる。話し合いをするにも、時間を決めてSkypeを使うケース、LINEのグループで各自が都合のいい時間に投稿し合うケースなどさまざまだ。

グループとしてのパフォーマンスを評価するために、どういう形で共同作業を進めたのか、その記録も提出させている。「Skypeなどなら、いつ、どのぐらいの時間やったのか。LINEなら一部をスクリーンショットで提出してもらったりなど、どんなツールを使ってどのぐらいやったかが分かるように報告させています」。

全員、個別、グループ単位で、コミュニケーションのチャンネルを使い分ける

ディベート終了後には、全体として感じたこと、自分個人として考えたことをCourse N@viのレビューシートで提出させる。あるとき、他人には言いづらい個人的事情からその論題について「賛成」の立場を取ることが非常に辛かったということを書いてきた学生がおり、じっくりと話を聞いたという。「この学生は、レビューシートという、全員が提出する機会があったから書けたのだと思います。わざわざメールを書くのはハードルが高いし、ましてや直接に言いに来ることはないでしょうから」。

この体験を通じて、多様な学生の一人ひとりに寄り添うためには、多様なコミュニケーション・チャンネルと機会を設けることは非常に有効であると実感したという。「留学生の多様性については十分な配慮をしてきたつもりでしたが、学習障害なども含めて、まだまだ教員が想像もしないことで苦しい思いをしたり、十分な学習が妨げられたりする学生がいるのかもしれない。そういう意味では、学生個人と個別のチャンネルを設けることは、何かあったときに学生が安心できるセーフネットのようなものにもなり

得るのかなと考えさせられました」。

Course N@viでは、教員とクラス全員、教員とグループのメンバー、さらに教員と学生個人というように、目的に合わせてチャンネルを作ることがメリットだと、尹准教授は感じている。「私自身は助手時代からCourse N@viに関わっていたので当たり前のように思っていたら、非常勤で他大学の授業を持ったときにはこれが利用できず、不便を感じました。今使っているのは、動画の配信、レポート提出とフィードバック、レビューシートと個別の連絡ぐらいいますが、それを学内の安心できるシステムの中で使い分けられるおかげで、私は非常に助かっています」。

「目の前の学生の学びの質を少しでも良くしたい」と語る尹准教授は、今回の試みを、「教育現場で感じるちょっとした問題を改善するために、すでにあるものを工夫して組み合わせただけ」と謙遜する一方で、「特に高度な使い方ではないので、どの授業でも応用が効く」とも感じている。

今後、「学習の個別化と持続可能性」は大きな課題になっていくと考えている。「マンパワーも教員の時間も限られているなかで、最小最低限の負担で教育の質を担保するためのソリューションのひとつとして、ICTは大きな可能性を持っていると思います」。